

今の中佛法なるは世に
あまざるも人た心出まれば
死もなき事胸のわきふ
ちかき心は心なるは眼を
ひくくもあまの能くは権杖を全
難得き法はのるは凡人を
まの心入して極楽の西の海に
引渡さるるは乃の法に二六
時中も概これの色なきは
いかにいかにいかにいかに
すもいかにいかにいかに
懐疑の心せらるるはよす



函山文庫

アカキ
56-4098

56-4098

立春日七十五日此を乃こころ
探るものなり。真砂地より法を
作るものなり。此の法を
乃こころ

大坂檀林

吉本友雲

延宝五年

年

三月中旬

大坂檀林三日千句

才一

初搦銀何



檀林乃山岩ひよきて初搦益翁
板木れかすも天下一枚友雲
増駄賃きこゆる道徳備く由更
新より草も物も完く均朋
薄く思すも放りては凡そ林
さあ井戸智乃ものより友雲
真砂地八月は走ある露の
大廻机の机下より友雲

賣掛也秋をかねぬ衣青西島
みくもむらぬるる人の玉由東
枕若くしてきたあつ可也均朋
不自由あつても浪の川に座を友
念有場むこれ報をうつく友も
まはまるとれ又のそりや中柴舟
船屋住の唯極よのさしつて益氣
子活のわゆりも笑佛の西島
天よあつたは舞のふた之具足如首
むくくとすく月と日と星 夕島
露よと野をく衣紋つて 益友
役者への名付事此虫啼 益友
松陰金より花のよと興の屋 由東
ささるる露をせまるとる 凡 小秋

いっ幟いよか 一と花外黄の露
竹のこや 一れか 一も美人 益氣
縮もると相の相のまの月 小秋
とやい付句よ 鷺鴨の声 柴舟
池浪のよとあつ茶よ朝之粥 夕島
やとあつわとて 柴あつと也 友島
法奥れ夷の女房とくは 益友 均朋
子のゆるとまはかののいよ 益友
からとすよ南の凡のさ清く 益友
久しく強ふ兼る酒のよ 由東
あつ進打とらふも 娘の露 益友
いよとて 芝居弟入らと 益友 益友
くかたはつて けて 空の月 如昔
邪く馬とむ 麻の通路 小秋

中乃人栖いけく谷深き蓋友
とよむじし新く健人志き如昔
火渡や水のうくく消くを業舟
浪のさうみ赤くぬれ網均朋
地より三千里のほろむを由栗
煙くや竜宮富士の朋青蓋霧
毎行お浮世げんする纏く西霧
大もや人ともくく其賢情多鳥
将衣まいつりて悪くく本秋
紅葉みかぬぐわぬ其醉さあき敷
一月星よ月を凡てかたり均朋
利刀のくく人處をくくあ蓋友
死んくくはまの埋むくとたに友音
鳥くく響くくねるあま物由栗

鳥人志き如昔と持蓋友
とよむじし新く健人志き如昔
火渡や水のうくく消くを業舟
浪のさうみ赤くぬれ網均朋
地より三千里のほろむを由栗
煙くや竜宮富士の朋青蓋霧
毎行お浮世げんする纏く西霧
大もや人ともくく其賢情多鳥
将衣まいつりて悪くく本秋
紅葉みかぬぐわぬ其醉さあき敷
一月星よ月を凡てかたり均朋
利刀のくく人處をくくあ蓋友
死んくくはまの埋むくとたに友音
鳥くく響くくねるあま物由栗

本津帆子好風志るき浪舟益友
又津城銀し不月色 本秋
若屋形そる花屋求らば 柴舟
膚むとくの小田のまする男 益友
くわ綿のうぢく眉絲さ如首
まは物つりよ猫うらるる友鳥
白むるもむ八鯉城さきま 西鳥
持る青柳さし手酒赤不由東

益翁十 益友十
友雪八 素教七
由土十 柴舟八
均朋八 如首八 行々
本秋九 執事一
夕鳥八 西鳥十

志

才二

山梯何賜

山櫻雲也三花共高待繪友雪
みされ箱より風の青柳 均朋
たぐ二火入消を朝の雪雲 益翁
枝友けくふ雨すくもり 夕鳥
むのほく鐘也響きてゆゆ 由平
風くれあつてむいよ 夜片 素教
膝相撲じり風所月落て 本秋
殿の成勢よあひく小薄 如昔

馬山とくむゆかふの鶴益友
大津八丁十番之原草一柴舟
丹陽青竹の字室の白紙
やん挑灯よはる花の月
五月周道よりい送る草
標の法より小口庄の申く友言
神より教法師のよのいしと
今修終ハ血のまゝこし
月をふまよこふの道に
箱根の越るう旅まふ秋凡
月よりいしとていしとて
大石銀もくまゝいしとて
花の種いしとていしとて
山に衣はよの油一也

小盃よいしとていしとて
日新志のり小横河のり
二重門のり空のり
以のり公事人のり
山をいしとて地寺地のり
縁起志のり雪のり
柴薪肩をり牛乳玉
志のり車回りのり
月をいしとて柱のり
よりいしとて腰のり
彼をいしとて例のり
七夜とていしとて酒のり
地をいしとて丸のり
ぬるる看板や麻のり

らよむる子草其教を物足如昔
片所の胸を廣きじり野益
按摩する流るのあり富ま成益友
氣つこつこつこつこつこつこつ均朋
情とて虹のけしき瑞女郎西鶴
る今も鳩の袖のけしき香は母
くき契一夜泊の旅物人本林
るこつこつこつこつこつこつこつ
わのま路の名所いふは後集負益翁
訪主まけしきつ川あそ衣西鶴
う露も文を綴るけしきと夕鳥
月待はせ料理出まは益友
本のこつこつこつこつこつこつ由中
長い羽織や袖のまは凡益友

らんかよま鳥の精の昔相西鶴
馬の澤りと信とをこつこつ益友
兄ふれぬ古書の内容とけしき如昔
敵の力なき世は志ろく山本林
点とつこつこつこつこつこつ均朋
大母衣負一林の神つこつ益友
こつこつこつこつこつこつこつ益友
月と志るもく幽をけしき益友
あはれ可柳の陰をまはし益友
舟よりかつこつこつ浦浪の音夕鳥
枝本林のけしきけしき益友
固やこつこつこつこつこつ西鶴
是のよもつこつこつこつこつ本林
あまこつこつこつこつこつ由中

棚板が不破の中山すこかき 柴舟
とん舟より藤川の浪 友吉
鉄舟よとん舟は今道具を 如首
ま〜と舟入むの汗あり 均朋
朝の風を帆にたたくまは 池東
振舞の〜〜〜〜〜 益友
かわもの法など〜〜〜 友吉
昔の〜〜〜 友吉
よは〜〜〜 友吉
月夜〜〜〜 友吉
日千句〜〜〜 友吉
る門の舟の〜〜〜 友吉
お〜世旅おけ〜〜〜 友吉
作〜〜〜 友吉

ま〜〜〜 友吉
一〜〜〜 友吉
と〜〜〜 友吉
拈圖の〜〜〜 友吉
と〜〜〜 友吉
〜〜〜 友吉
い〜〜〜 友吉
浦嶋の子を〜〜〜 友吉
と〜〜〜 友吉
ひ〜〜〜 友吉
三本の松を〜〜〜 友吉
吸物い〜〜〜 友吉
橋本又塩竈の〜〜〜 友吉
いは〜〜〜 友吉

女郎也... 均朋七 如昔七
 益翁十 益友十
 夕島九 柴舟七
 由平土 執筆一
 素教八 西鶴土
 友雪九 本秋九
 均朋七 如昔七
 益翁十 益友十
 夕島九 柴舟七
 由平土 執筆一
 素教八 西鶴土

卯三
 一村探葉何

削札や... 均朋
 池の鯉... 友雪
 竜舟車... 素教
 わ... 益友
 箔紙の... 柴舟
 火... 由平
 小... 西鶴
 大... 柴舟

鳴麻の妻とありて可くも
あつて其時由程と入程 益友
通路の古くは程を可くは
口舌とつけぬとあるは
く人程のほつたつと程
申す程のほつたつと程
銭つては百物とつて程
志實とつてはかゝるは
是とつては生死の海に捕
すてはほつたつと程
由所入のほつたつと程
古くはほつたつと程
夕山の花津衣とつて程
加はるとつては雨とつて

膝の緒も今居るは鳴蛙 西鶴
少く股ありて玉川を流 如昔
布は寸女と通じては益友
おとこは程とつては益友
お水折とつては中世の益友
袖を潤くは程とつては均朋
かへは余はほつたつと程
お多入のほつたつと程
は捨つたつと程
一おとつとつては程
打たるとつては白乳朝有と程
扈従のほつたつと程
心なきとつては程
大師とつては程

胡蝶を走けこ小笠をよめて均朋
雀がうらぬ湯杖は心音 中秋
うと夫も甲れをよれぬ公 友雪
枝大床もあつ道をも世 夕鳥
國留や依の凡は庭に去 西鶴
けこるもふこいもいもさ 生半
いのみをまふぬはかきり奥 益友
あけこもれを海より舟 柴舟
よの姫終は塵土の夕煙 本秋
初は子残や一其おもひま 如首
二心おもひこりこるもれあ 由平
五人今ん子も奥次月 和齋
よの漬の只代も人なれは 益友
いの字のほつこつ海に 喜寂

よの海梅もよききり別 益友
むも人申もれをうらぬよ 中秋
雲の袖候もろね結もろぬ 西鶴
こ津し女やよこもあは 由平
きもろ給のうぬぬ獨りき初 益友
上酒いもれも心二もを 益友
母をよおふかつは若し 中秋
湯風呂もれを何くも頼 益友
先よりよもしてま女郎介 均朋
是用もろもろ袖のむ草 益友
入大工いもてまかすもろ 益友
竹田月も懸るぬして 存昌
衣もろや綿もろつ小ね 如首
獅子も舞はよもろのまも 柴舟

張貴は文珠と転く秩簿に秋
あくさひめをかすかしく東 妻
教あな度烟やきききき盆由平
まふま礼場は人の力の上西鶴
居所まぬ鞠の告はじは友
遊行の柳いりあそむ寺益友
炎さるしあそむ教子まぬ世
晴るまのりりむ子ちりら如首
香箱は白く赤や二白く友雪
こつこつ小指のちま月あつむ中平
ふくぬ別をつくる石風井名鳥
琴を梳き茶屋の月新均朋
白糸あつむ七夕後を指しけて露
下踏まるとふあ音ひ下るる田中

八重雲はまのふやと春市を露
らんまの清の塩の山あつ西路
まふまらして秋の流しけて均朋
君うま平をさ先の内を友雪
まふまぬまの松を我本屋如首
まふまぬ月や極下あつらん友雪
以西神露もまぬ薄の白や秋
月まふまぬまの秋の村雨由平
まふまぬ様子今あつあつ西鶴
草の菴の流渡うとら紫舟
拾りまふまぬとがうや山崎益友
油草一ひりり名所一見ん益友
焼食大畑の元は叔とく由平
養の園まふまぬとら三極の浦松益友

鼻紙もさうくさうく沖津港均朋
うまき貴あそれ物舟本秋
家より又むらびる志うし親友
しー人の里をむくく分別友言
入札もかある事や本橋山素敷
所よりてさうく境入白む由事
竹篋やおんる花をうす西鶴
是なる梅の法よさう人益翁

- 均朋 八 由事 十一
- 夕島 七 紫舟 八
- 友雪 九 本秋 十
- 素敬 八 益友 九
- 益翁 十一 狹子 一
- 女首 七 西鶴 十一

月四

薄花欄何業

分別や薄花欄ち月夜夕言
況し解相あよ款冬素敷
三味線子さの蛙も友呼く均朋
類船はあく雨止る夕言昔
遠山入るはあつて城本友言
お秋よりさうくはははは
親この心役有るも今朝月益翁
公方さん威えんさうな松益友

今も銀山一峰のて由東
くも庵に鶴鬼さうじ宛 不秋
武落のむあゝああを執筆
あまれのうね指酒も池 西霧
深法のはらとら山宛やて 毒敵
草分しんも藤芝右し 夕鳥
吹送れ凡のも付家人程 如昔
力持すうくく之涼しき 均朋
任吉の漢も基盤のまも 世母
中法師の以敷月をたうとむ 反雪
鳴虫の病も深き験みせ 益友
房をたのしむるれ後中 益友
あまののまもみくく世り寺 不秋
といつての柳もあふくわ 中葉

菴とむむ恋の科の信す 西霧
こゝろは平忌用すしれ 益友
款授をむ母のよもろくあ 益翁
はるの菴も残次うし物 如昔
とつてく下梅の水の清い 夕鳥
よき公点は真令堀いれ 不秋
新枕吉備の中山帯とうせ 世母
扇とかくハ菴飛くく川 毒敵
おつ焼の燭さくはよまも 均朋
玉々十人梳家具れ青 西霧
新中子妙なるなとて 益友
法の基も今を板しき 益友
月やあぬあふいれぬ 由東
藤の川秋の破る電井南 益友

露竹雨之根下と金羽若均朋
月也引ましく乳首のたろく
水葦の思くうみふり風を
教書すく経末のたろく
張群く今ますくも河は流る
十の億とが糸の草靴の中
忍いせんと田舎の掛り也
糸と糸の道の若く下均朋
縁のりくもまのりくも
花と花のたろくもたろく
力入の縄もたろくもたろく
出馬の電うもたろくもたろく
ひもたろくもたろくもたろく
うけはらりもたろくもたろく



約朴と凡のたろくもたろく
むろはらりもたろくもたろく
忘蓋をたろくもたろくも
尾上の根もたろくもたろく
兼耀者ま掃一所の旅衣
かまね蒲團のたろくもたろく
むれとけつりもたろくもたろく
子丸あもたろくもたろくも
あくく屋のたろくもたろくも
俺と涼もたろくもたろくも
鹿もたろくもたろくもたろく
かまけもたろくもたろくも
貴もたろくもたろくもたろく
糸もたろくもたろくもたろく

わんくふ家譽も富士宮 又馬
勝うららしやうの地とて 紫舟
おとれく河原とて由は凡 本林
もくも責まはしき一しり 又
田つゆあふこみ石は目あふ 友吉
名うて唐よあら風つこふ 均朋
ふくは来ぬまは常陸の竹の好 西鶴
藤屑の畑ききく一庚とせ 中平
あつじき伏格の麻子場と 善敬
ふくはく一や如路のちく 善敬
踞おれあふやちお袖骨 均朋
氣を振く一衣しり 音 西鶴
おれく人の口は北川やと 中平
ゆくやかすらんあふとて 善敬

ろ兼よちふ酒やまの由 紫舟
まの象眼の燕飛うよ 又馬
文波子初をつまは帰人 善敬
通事よゆらん浦浪の色 本林
以杖お醫者中よとれ松一本 友吉
ろろ衣将衣の甚かこふ山 善敬
本亭よまたくことおふ大踊 西鶴
又よ旅よとて揚のあ若由 中平
新ん食いさふおこふ茶 如首
秋さう何しきもおこれ 善敬
山里月をひらけり青佛 本林
海のうららぬとて 均朋
名方よとてく凡や 中平
子孫の介ハとて 善敬

之れは法名時と云は濃水
 酒のたぬは武庫北山平
 斤身世質九言の秋均朋
 かあし舟ら浦風心音平秋
 けしとよせとあふ元貝由宗
 那波入浪も入残一わらと
 むの川治家進と中良昌益
 那端のむり敷た益益友
 夕馬八 益箱十
 素敷八 益反十
 均朋十 由平十
 如昔七 平秋九
 友雪七 秋草一
 柴舟七 西鶴十

力五
 並木様中何

継ぐや並木たさく右左 素敷
 以下左邊乃山うすむえ 如昔
 類の文字馬か名残也情心 夕馬
 朱色とるりそり白いこよ入 柴舟
 益よ耐徳の松の枝とむく 均朋
 准う之級れ馬のまかつ 益友
 送る荷月月秋進と名振る 友雪
 樂屋れそり麻水色 平秋

霜消くからる河は人の橋 益友
 美喰よハ夕言 益友
 出鳩おもすは波風か海を 益友
 いづまに家ハ鬼志ハ雪屋 益友
 馬下踏を南うらふ家 益友
 人形はむ紀伊の国守 益友
 蛇うつくま真母ハあれ 益友
 ぬり糸地をさむつす貝 益友
 いとあふ思ひくさ命をなま 益友
 ちとくくもふと道路の家 均朋
 待月月と誘む其日すき 均朋
 浪川の初めつすさち 友言
 長点をかろるあむ風 由平
 名香くく梅自よま 益友

一乃ま二宮の朝うす 益友
 舟後くくま雨ま音 均朋
 博更つと朝の雲声 益友
 わつとまもあむハ買 益友
 困むよもはまは家 益友
 茶事とては燕ハ酒 益友
 柵入尾のまはま 益友
 作塚まももこのひ 益友
 川舟あつ跡をまむて 益友
 石重ハ目つとむら 益友
 秋の目もえ片足 益友
 南まに泥ま入あ 益友
 廣沢ハ池の鯉を 益友
 毛石の山ま志 益友

以百味入瓶のやも下流如昔
 瘡をいつくし落れ去る言由平
 夜わしとて別する程にい女本秋
 きくま役者も毫る紫丸戸益友
 とれ織いじつにうくく袖を病
 代まよひもつても持の底紫舟
 雨くま神守まもむ別もの益友
 とれやいし向のえん海き本秋
 少と物まに風なまこけ箱久鳥
 京都のん人舞まれより丹友雪
 門徒流もくむ吉日と幸一均朋
 生死のうく川友む出月白菊
 結海おまれ風吹くくま友
 連ふえと書けり多の結り益友

去つたなり十日の期りけ由平
 芳かや中よじす伊勢舟紫舟
 何よよの付の園酒料理て益友
 志しぬく存れぬく撰墨本秋
 綿糸やういぬ後と女をん友雪
 東京舟も渡れぬのこむ如昔
 世帯の園或山と名別よ知結
 女房ころもやんころも均朋
 心中つくとく別よきさ刀益友
 肉食とちり別路のも益友
 月の旅物お母さうからう夕鳥
 はあふうらとそ落れ去る友由平
 ぶくくを網まひく元友友
 しろれや一まをばをほり友

よ中より成るる友の事 柴舟
妹よりゆく代親仁の事 均朋
待望の人の事 吳人彦の事 木秋
世よりゆく志の事 国介の事 幸敷
法親の事 宗光の事 益友
後代ゆくる事 山田の事 益翁
おれよりゆく事 育の事 雅子 初鶴
おれよりゆく事 山田の事 木秋
養子生をゆく事 山田の事 由果
一箇よりゆく事 山田の事 友若
火渡りといふ事 消て行雲 益翁
地獄といふ事 法乃草の事 又鳥
人元へ入る事 又すけの事 聖音
埋んく事 山田の事 山田の事 山田

猫の糞かひの事 山田の事 山田の事 均朋
新やある事 山田の事 山田の事 益友
栗の事 山田の事 山田の事 又鳥
行者の事 山田の事 山田の事 如音
秋の事 山田の事 山田の事 初鶴
この念佛をゆく事 山田の事 益翁
この念佛をゆく事 山田の事 益友
市女も今も人仕事 山田の事 木秋
若の事 山田の事 山田の事 由果
山田の事 山田の事 山田の事 幸敷
江戸の事 山田の事 山田の事 益翁
猿樂中の月をゆく事 山田の事 木秋
音の事 山田の事 山田の事 益翁
去る事 山田の事 山田の事 由果

小報のほくもふくはる露の色均朋
 寺傍の草花袖のひきすり 益友
 今日も清く雪作をとりぬ 中秋
 志はのきく巻かきりぬえ 柴舟
 おしとら服の膳のよぬき 中東
 十二はひむごころぬきかそ 初鶴
 咲たはつ付のふに古屏凡 益翁
 糸のすもやまあいゑる相 夕鳥

素数七 友七
 如青七 中秋十
 夕鳥八 益翁十
 柴舟八 中東十
 均朋九 初鶴一
 益友十 西鶴十

中七

深山極何力

也捨坊深山極といふは昔
 系父全一ゆり雪れむあ 柴舟
 小征樓はさるるきよ風を 素数
 今離事と志のゆめを 益友
 張費のふも孫くをよこさ 夕鳥
 じき智わまはる鴨爪色 中秋
 おし服の袖の霜の月を 均朋
 初老の衰句高き松を 中東

口よりおぼろげにみえたるは
 八十過ぎけりてわらわらふ
 ぬらふことごとく青き波の
 原塩のまじりて焼く
 名に散るるもきりぬ
 蝶のしき悪の火よせ
 袖をふるふもきりぬ
 尾のまじりて焼く
 定より山路の月れ
 証をきけりて
 浮きのみりて
 駿河の石所
 北は臨江戸
 けりて
 友吉

春日新入のわらわらふ
 うららかにすいりて
 一ひれは
 葎若石を
 石津のまじりて
 真まじりて
 てんごよ人の
 月次會の
 よし
 中
 今かす
 伏猪の
 本や
 道介
 友吉

庵の気は海遠く青晴く益友
呉服所より外名は秋均朋
文の字は秋均の一字は秋均
くくれ鳥の子もたけて又鳥
とくぬぬかまの市は合点の仲
博東の寒言は庭田の末又言
以法度の守りぬる代は秋均
をけくくり戸はむらじは又
寺系丸は歩ん足よく益友
青きりの衣十徳かへて如首
まじりくくと秋いつ秋均の心
くれは秋均の月とくは五思
秋均の自心をくつは古声
兼身世のまは鳥の色は由

もちたれを備へ申合は秋友言
今朝はかすみの秋均の心
くくれは秋均の月とくは五思
秋均の自心をくつは古声
兼身世のまは鳥の色は由
一柱を造れぬくみりをく
まの縹緲も秋均の心
膏茶のつとては秋均の心
天し女もやと涌の袖も秋均
大酒のわらぬとよむは秋均
稻妻のぬるも秋均の心
糸うけ馬のかつくは秋均
清つる雪を分ては秋均
かうくねるも秋均の心

三
如月とくは縁八別湯とて 素敬
足あらしう年此言らん 西鶴
堅土も古風とて 流六谷持唐 益友
道をすて 今も続くと 志也と 均朋
阿弥施佛縁と程也之月 又鳥
字名ありらん 凡かひと 益友
下入ると 留さ其為と 中野と 由平
あらしうしよ 主風とて 友書

- 如昔七 均朋九
- 柴舟七 由平十
- 素敬九 友雪八
- 益友十 益翁十
- 又鳥八 執筆一
- 本秋八 西鶴十

才七
一と探 藍何

雨漳子一重探や 此れも 柴舟
旅のつとめ 忘らん 凡 益友
香印 箱も 初言 均朋
名長湯と 志胡 雲と 凡 又 秋
秋のよ 秋月 入と かとも 凡 益友
薄入 穂波 らん やらん 凡 益友
火打 石岩 根子 殘 露 滴 くと 鳥
麻の 伝 少 じ 馬 追 の つ 益 翁

用桶よりのあけりかゝる如
 あしむてけやを局友書
 打浦くもせんらもつる倉由中
 須よはひかへ八重夕凡 如昔
 袋子れ啼声告れしむる 益露
 清芽くもるるんぐて 本秋
 内書信いつくはにあつと山 嘉敷
 谷のきくも湯及世月かん 均朋
 埋本と向し捨やぬ奇跡藤 如昔
 かくれぬ花も名をり川さぬ 如昔
 外電も袖の志うもまきそて 柴舟
 とうこんをまれ曉重月 中宗
 せう山をうて繪着板夕鳥
 夕と上もや当の業人 益友

かの西や去年ね本もあり 友雪
 とうけ夜うち歩る足 均朋
 くらむ旅路の林よこれ小判 益友
 駿河とりも宿入中月 柴舟
 とうこまく烟さるえか金剛 如昔
 かちやくの責まほくさう 夕鳥
 掛りりはまきあひぬきら 均朋
 夫らと一いよきやうこれ松 嘉敷
 友徳の道をあつとる心 中宗
 いまゆもまぬ小用所 益翁
 人心それとハ人守明り 本秋
 秋むね山よいらはには念 如昔
 くらむ山遠い名下其夕 如昔
 本陣の文や江天中言 中宗

飛騨の月風をゆく竹種 益翁
 未くけ渡す真砂地全 中秋
 老の浪八十も今ささく 如昔
 ぬ残の霜よかつても花巻 友名
 兼是も江戸の首尾 以爲師の家
 かすら夜時服 祥衣 益友
 二乃度の療治よ上気 益翁 中秋
 六人まゝくまゝに 益翁
 白落も百まん人のむすで 益翁
 月をんくつらばはすす 如昔
 鳴虫も海よ唯うあらくと 紫舟
 真葛くくくれ 猫うもり 均朋
 心とらん妹の持場をれ 益翁
 ともけ起信のあすまゝく 夕鳥

初蝶入の友と成ゆくおひ事益翁
 糸面のみもみ月科ゆき 益友
 兼の戸も流石教者お栖よ 如昔
 諸行無ると詔音く胸に 益翁
 神鳴や三井寺よおく落ゆり 紫舟
 益観音のあまそあつてあつて 中東
 用心のあおちまらぬうけぬ 如昔
 凡のあまはけぬあらん 友名
 中露地をよばつてし持討 益翁
 うん足袋ぬくはらうとあ 益翁
 葬礼のうつあさいらの 均朋
 狐もたらもち教のゆづ月 中秋
 少のあち指のまゝまら 中東
 ともくのあままゝく 夕鳥

云居次もわたり今もや 益友
尾がしれけりて三輪の神心 西鶴
時高の声鶴よ似たりたり 素
祿つとくむきふ中れ一ぬ 本秋
夕虹や羽織の紐よりく人 友言
もくも海まはるる出海せう 由宗
の月影く影るりり地は心 益友
繪巻屋おらひまゝ雨の音 均朋

- 柴舟 七 夕鳥 七
- 益友 八 益友 土
- 如音 八 均朋 十
- 本秋 九 友言 八
- 素友 九 枕子 一
- 由宗 土 西鶴 土

才八

千本櫻の何食

祇園帯千本櫻也朝清の益友
客待もまを人の形れ言 本秋
御美梳りすきあはれ海く 柴舟
入目けなうんす切の水 由宗
御紙かかぬく白波うれ 如音
雲とくく旅すくき 益友
友友の月影けりるも 素友
大さうくして八馬心けり 友言

の犬もわきと淋しき声 友雪
 鷺おとろく人たる首 均朋
 侍も指家ぬねよあまは 均朋
 据とみは平ぬかすまら 均朋
 地も川とのまきす久く 均朋
 る山よりき伊駒かつき 益友
 いつ分よ大より袖ぬね 由平
 念有もつけばく麻色 紫舟
 里の秋家買うと借り守 益友
 月丸とくくあまぬ丸く 如昔
 晴くくも舟のえれぬ表 友雪
 食ハ小豆丸大細とく 友雪
 およもくも沖之人家ぬ 均朋
 のれ集ももり代たんま 友雪

え伊ぬ字石飛山を川く 如昔
 けめうく付くけいほぬ 友雪
 神鳴の落く所ぬ雨のえ 友雪
 屋根のけくくもき奥 均朋
 完料の模のくま川浪を 由平
 酒舟くく心雪の山く 益友
 袖まよりきくくす斤何 紫舟
 本ぬ衣衣たるく早ぬ 如昔
 くらむむくくもき懐く 如昔
 赤成青紙しくくも 友雪
 峰高くくく草鞋踏分 友雪
 先達くくく難き千万 由平
 是く月れくく連続く 友雪
 秋くくくくく徳 友雪

杖をくえあふし系掛二玉 益翁
昼久しけし月乃山越 柴舟
い舟の舟座杖架を具後 素敷
石すえのこま丸を扱板 益友
足到やまのつ綱消定 如昔
敵の味方も及れ世より 均朋
以子息の流致くく人箱 素敷
菴を捨し月ハやハ幕 田平
素賣人世虎那の位令 如昔
千里のつこくくけれあ 均朋
浪の月がたがしつ沙さハ 益翁
む大舟も小艇のく人 益友
打はる四高子ハ杖伊長衣 友翁
悪うはのつくる人ハ杖 本秋

兵江合言まの麻杖身具 由平
旅わこるむま其ハ中宿 益友
く銀をかつこ杖架をもち 西鶴
一川の利敷わくみる人 素敷
二の洞まのつ杖架をもち 柴舟
弥随の杖も及すしはハ 本秋
とらく杖架をもちつて大事 益友
腰中居山杖架をもち 由平
悪衣しる杖架をもち 益翁
杖架をもちつて大事 如昔
杖架をもちつて大事 友翁
杖架をもちつて大事 均朋
杖架をもちつて大事 均朋

入算也世稻妻をくみく 益友
門迄坊主をつき様凡 益友
行きの流るる白の頭取 均朋
山をこつてこ曲物今も 秋
惜まの花より日丸鞠に 如鶴
胡蝶も同一一五所人 益友
移むある系為美味も 中子
かすかかふる具足一兩 益友
百出くある海に古山 益友
古田の流をこいれも 友雪
川水より尻にけり船舟 如青
大用小用はく舟の首 如鶴
月の雲層層月輝く玉 柴舟
桐油をいれぬ袖の落 又馬

秋をく朝鮮扇の 益友
小凡呂の肉よりく 均朋
志の波も粉糠とよ乱 本秋
わつとるすく屋塩火の 素敷
大鯨川よをく金六磯入 友雪
是なりつとる包丁真 益友
過去帳も事重かぬ代 如昔
餉わき六の茶湯もわ 本秋
法華經の旅の心を 由平
川を鵜舟よはく糸掛 柴舟
牛より大雞淑の流の 益友
浮世の垢ぬれ行の物 又馬
夜をわき六の茶湯の 如鶴
はいて死るぬれ手ぬ 中子

厂啼く拍子くといききい 蓋友
 今一声の越え海了 蓋友
 かろくく袖の白雲埋ましく 如音
 くら貴なる山の上りく 均朋
 ききみぬくこしはぬ思 益翁
 主取とれし石火の走り 如音
 ちやのせの昔よまむ平花満 由平
 去月うき鳥のくらえぬ此 柴舟
 蓋友九 奉教十
 本秋八 友雪八
 柴舟八 夕鳥七
 由平十一 均朋八
 如音八 如音一
 蓋友十一 西野十一

才九

墨染探帳何

箱戸樋や墨染探帳何 本秋
 雲流みたりもよき如脂 由平
 雲一層一入形取敷 蓋友
 切合りも茶きりく 蓋友
 明くも山路介れも如子 柴舟
 柴すま衣よされも如 友雪
 上塗や由軒端の月も如 如音
 ちりし茶や凡のく如行 均朋

とちりんくくたれどしゆくそ 蓋
雲のえ袖もせ人くく物 夕鳥
夷度う天津し女も宿といと 鴛
たらくも渡れりくく山 如鶴
浮橋くくゆせくくおもぬ 中
はいまうれくく浪の水根 下秋
川川の岩まきくく竹たけ 益
人くく犬もはあく 従士 益友
一いのまやろくくく 友雪
八坂の塔もくくけさき月 柴舟
女房桑屋袖くくく 友柳
おもひぢくくく 鶴う海海 如昔
足打もくくく 梢のむら 夕鳥
さくたくくく 梅 蓋

塵くくくくく 女乃強き吉四紙 如鶴
くくく 滝のくく色 均朋
夜這人も傳てくく 岩根 如昔
同屋くくく 友雪
海書子流つてくく 桐葉 益友
くくく 益友
何んくく 中
くく油をまきくく 夕鳥
くく 蓋
沖成のくく 益友
くく 益友
まくく 如鶴
肩尾といくく 中
京くく 柴舟

東山あし山あしあし 何あ 夕鳥
真鳥うらうらと名所付也 均朋
道行をかへる色しきりく 蓋
後をけくく小庭のうら 如昔
舟渡しあつていなき渡立 如昔
おき成程女懐家と志中の風 柴舟
鬼門のいともあつてあつて均朋
叡山あえく今大江山由平
天狗殿あつて羽田の屋いすま 益
三換あつてあつて小車あつてあつて 如昔
入道も奢極めてあつてあつて 益友
あつてあつて男麻も天晴馬 友友
十好あつてあつて紅あつてあつて 由平
あつてあつてあつてあつてあつて 如昔

羽あつてあつてあつてあつてあつて 如昔
あつてあつて今度人あつてあつて 由平
あつてあつてあつてあつてあつて 柴舟
脈あつてあつてあつてあつてあつて 均朋
朝あつてあつてあつてあつてあつて 柴舟
千日寺あつてあつてあつてあつて 益友
あつてあつてあつてあつてあつて 由平
凡あつてあつてあつてあつてあつて 如昔
味あつてあつてあつてあつてあつて 益友
あつてあつてあつてあつてあつて 柴舟
あつてあつてあつてあつてあつて 友友
雪あつてあつてあつてあつてあつて 柴舟
あつてあつてあつてあつてあつて 如昔
水あつてあつてあつてあつてあつて 柴舟

今谷とやれ令く作良山 如鳥
袖枕してとゆる旅籠屋 均朋
る云よ種バくして妹家 夕鳥
さしとらねむら蓋れ器 義教
はらとて教事とつて叔家 如昔
佛の祈りむ遺物やとぬ 益友
町中をよみしを定まれば 均朋
よい徳しのうれ公事宿 西鶴
介別のぬいぬを埋まき 柴舟
店くハ種乃自ハ水子 中宗
露くハ凡の便ハ負荷籠 益友
都の月ハ澄地四五人 友吉
一舟くハ花ハ浮きかゝ幕 益友
火をわしとしくおろの下崩 如秋

書海友本ハ十町二十町 由平
ハ勢勝つて武庫ハ山屋 如昔
大書請難波ハ浦まらり 友吉
粘けくハ浪ハ真砂地 夕鳥
八百日ゆく度ハ挑町 如鳥
クハも揚屋まらりハ代 中宗
家悪ハさハきとるりて 松凡 柴舟
洞ハ海ハ舟クハれハウ 益友
杖燒ハ彦肩ハ綱流消 夕鳥
額板残ハ芦ハ八車言 均朋
荷む物涼ハき秋ハ那堂 益友
稻まらり寸ねえれ物と 中宗
菊徳ハ月氣ハ寸きじハ菊 益友
以所水引ハ滝ハ糸ハ 益友

仙家も長柄より酒酌ふ秋
 老を以て髪を埋りし年より益友
 すくく人をいさよとて又て由人素
 大ま俊よりすくよ圃小友雪
 以口上清酒を酌むけらぬ由平
 か一ト下れし年れり益友
 人を以ておんれれし年れり益友
 かい子をよき氣谷れり如昔
 由秋八 如昔八
 由平十 均朋九
 益友九 素教八
 益友十 夕鳥八
 柴舟八 桃舟一
 友雪八 如鶴十

才十
遅櫻何註

不達者れ人も待てり遅櫻 由平
 肥満切して八重あじ山 益翁
 酒すきみよあ雲れ雨 本秋
 野辺のわらや青那あ足 友雪
 洞も尺さむは鏡系池少也 益友
 付髪むすくも入れ凡 均朋
 小鼓の音もかすは月 柴舟
 吹志りしる哥は乃落 夕鳥

たごと切人の心ばやうけく 如昔
君待とまの床の半冬 素敷
よき思むなれは種り 狹き
心広のこころ 四目 西鶴
傳文してむもやう 益敷
阿蘭陀とつゝ 青茶 由末
入れくも 竹の皮 友吉
海まゝす 神の真神 本秋
極楽の風も涼き 稗川 均朋
互復れまゝ 友の友 益友
深すこゝろ 宿の宿 敦公 夕鳥
ひしとをよ 舟あり 柴舟
花は浪をの瀬 舟素敷
若くまよす 如昔

る 維子まきまての 火消役 如昔
今く 碎く 岩の 床 本秋
饒なり 苔の 甚と 均朋
太ま 格子 山 夕鳥
滝の 糸 濁 濁 由末
若い 若い 若い 若い 若い
若いの 道 舟 本秋
地 名 の つ 西鶴
茶 碗 賣 如昔
之 柴 舟
内 墓 子 友 吉
後 家 友 吉
後 美 帽子 友 吉
箱 書 友 吉

獨つて軍ハ秋の舟に於て 業舟
浄瑠璃うゝ系里の村人 均朋
以平真丸時を去るも 如昔
さいの川原をの月寸園舟 秋
中よ六季をれ凡の心ぬこと 如舊
孔雀鳳凰うゝ寸時鳥賊 業友
金の鳥刺は燕もわさきと 均朋
かすこまうれくは魚いゝく 益友
友度もまうておじを忘 友雪
名をまふ家々のの系紅凡 如舊
言舟の早もれをな冬鳴く 業友
舟にじゝく真砂地のと 中平
よみうゝきりれ色を秋の月 業友
百人一首をの葉れ舟 夕鳥

大あえれけき心と北に流 露
宿札のそ秋友れく里 業友
伏人山法使欠作の流を也 均朋
あ月してくは深草舟 友雪
舟神はうにぬく蟬の色 業友
あゆると公候うる秋白雨 業友
多湯まといさく小川の水汲 業友
あうゝ石もさむく血山 如昔
箱植乃松かりとらぬまを 由平
あこてまうると人すく雲夜 如舊
新官の流るまをけこ園月夕鳥
泪の滝くくこれあは秋 中平
かすくる康の音遠さうれ 業友
志うゝげくもあまうゝ舟 業舟

神道かろくおんぬまの房 本秋
魔法の種をまき深き 善教
指を八川目つるるうけ 善教
湯折の心を養生はあり 夕鳥
湯縁も奇麗まきほかに 善教
凡ゆるこまかきまの友 中宗
あつちの花摘のかほを 善教
むくかをうつこまるる 均朋
とらぬ河を懐紙なるを 善友
浪をまきこるるくゆるの系 善友
任るる 善の志を 如昔
むくかをうつこまるる 如昔
塗橋よ 曉の月を 由宗
独舟もて 遠山のまき 友富

立湯の奉行杖あれたの 色 善教
徳長刀やいしくぬれ雲 紫舟
霊をまき天津の掃り 均朋
一千年の余古れ海つる 由宗
螺の貝も今ハつる浪舟 如昔
時代はいつそ 秋の夕色 本秋
され徳根をまきまの友富
親や小指の首をまきまの 善友
鈴のまきや廊下伝はる 善友
常香きく寸奥の長谷寺 益友
包をまきくく 善友
こころをまきく 善友
松をまき神ハつる 善友
葉をまきく 善友

煉掃も仕舞をるれ又日新 益友
 表りよかお山乃増の色 均朋
 以依之入虎の巻家桐の箱 素教
 友物店を明不のくきく 夕鳥
 お江戸京大坂場長崎と 由平
 化意むろじふふ流の波 均朋
 延室の時ちりうれや花の登 益友
 松之五をれあみわし様 本秋
 由平 土 柴舟 八
 益友 土 夕鳥 八
 本秋 九 如音 七
 友雪 七 素教 九
 益友 九 執事 一
 均朋 九 均朋 土

追加満擧

孟やるるとれ入日満擧 西鶴
 提とよま月と梅の花貝 由平
 竹細削る春風よまれ 益友
 そくしむのそん吉下より 本秋
 老翁のまらう風谷がれ 均朋
 けんせやれ本業らう山 益友
 二の腕のけりれ月よこよ何白 夕鳥
 二のの衣もこあぬらん也 柴舟

尺八の吹河をきくは久風 書致
から守り存せし人鶴丸の末巻 如昔
海軍の松方公使の如く 存る
君代久し 血統を半 扱

正安六年 午 宗

年 乙未

京寺町二條上町

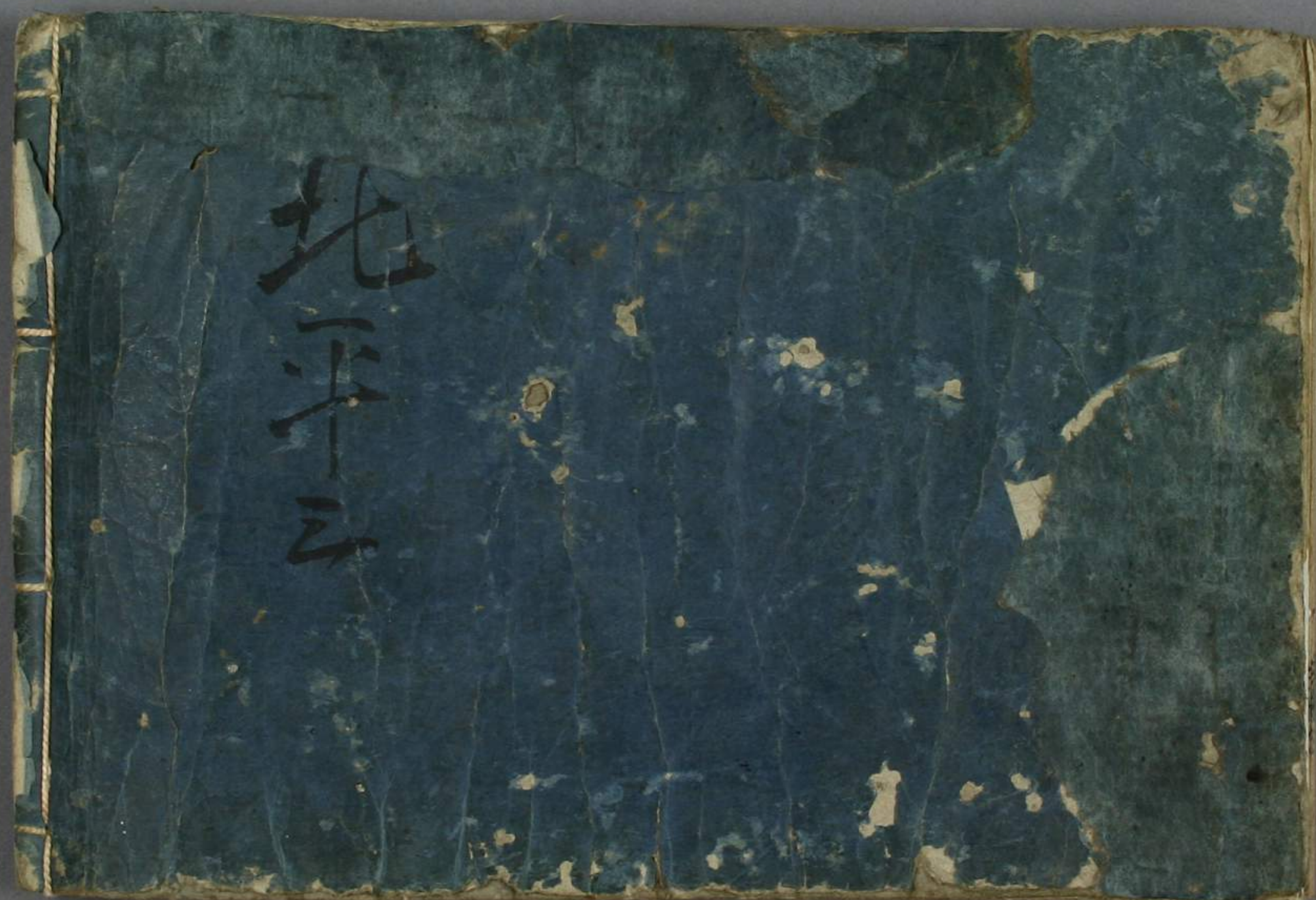
寺田與平治刊

林親舟

大坂北平三

司

40



北平云